

【大阪】「運行管理者試験は、トラック業界に携わる人にとって唯一とも言える国家試験。受験を機に、仕事に対する姿勢が変わる。」



「自ら学ぶ楽しさを伝えられるよう、いつも心掛けています」と語るのは、大榮(吉田昌弘社長、大阪市此花区)営業部国際貨物チームの東本和史部長(48)。

大榮営業部国際貨物チーム部長

東本 和史氏

「学ぶ楽しさ」伝え

同社では社員全員の運行管理者資格の取得を目指し、4年ほど前から独自で試験対策の勉強会を実施している。東本氏は勉強会で講師を務め、多くの合格者を輩出してきた。

勉強会は運営試験の約2カ月前からスタートし、当日まで20回前後実施。勉強会は一回当たり約2時間で、最初の1時間で過去問題を演習した後、東本氏が回答、解説を行う。

「実際の試験時間は1時間半だが、1時間でやりきる力を着けてもらっている。実務に関する問題は、選択肢をしっかりと読み込んでおく。『適』『不適』を選ばなければならず、慎重にやらなければならない。更に、見直す時間も欲しい。」

緊張感が高まる中で力を発揮するには、普段から早く解く練習をこなし、時間配分に余裕を持たせることが大事。

東本氏が初めて受けた運行試験では、答えが全く分からず不合格。合格を目指す一念発起し、対策に励んだ。過去問題を解いていくうち、ペース配分や引っかけ問題といった傾向をつかみ、二度目の受験で合格を勝ち取った。講師として教える基礎は、その時の経験が基になっている。日々の業務で忙しい中でも講師を引き受けたのは「運行試験になかなか合格できず、

悩んでいる同僚がいた。その人に自分の勉強法を教えたいことがきっかけ」と振り返る。受講者に対し、大事な

運管試験 独自に勉強会実施



「自ら学ぶ姿勢」だと常々伝えていた。「分からない単語や法律があれば、調べる癖をつける。一つ知識が増えれば、関連する用語にも興味がわき、どんどん

3月に実施予定だった運行試験は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け中止となった。「受講者にとって、シヨックは小さくなかったようだ。ほとんどが合格ラインにいたので、とても残念に思う。影響がどれだけ長引くか次第だが、次の試験まで改めて対策を進めていきたい」

(黒須晃)